

序

病理診断は間違いなく医療における治療方針決定のキーとなる重要なものです。しかし、病理診断部門は医療関係者や学生にとっても、決してなじみのある分野とは言えません。「学生のときに習った」「試験が難しかった」「基礎医学のイメージ」……いろいろな印象があると思います。病理診断部門が今や臨床科の一つとして重要な役割を果たしていることは、皆さんもこれから医師として経験を積んでいくとともに徐々に実感されていくことでしょう。

病理がやや近寄りがたい印象を与える理由として、情報の不足があると感じています。今回この書籍では、臨床に役立つように可能な限りわかりやすく病理診断学の世界を紹介しています。病理とはどのようなセクションなのか？ どのような目的で染色し、どのように診断を行い、どのように報告しているのか？ また、どのように依頼を行えばよいのか？ この本を通じて、今まで何となくしかわからなかった病理写真の見かたがわかり、近寄りがたかった病理医が少し身近に感じられるようになると思います。

ぜひ、この本で得た知識をもとに病理医とコミュニケーションを行い、日常的なディスカッションができるようになってみてください。病理医はコミュニケーションを求めてくる医師を温かく迎えてくれるはずです。

またこの本では、病理に苦手意識を持つ一因と思われる専門用語や、種類が多くてその意義がわかりにくい免疫染色の抗体について一覧にして掲載しています。いずれも病理診断報告書を読み解くのに大いに役立つでしょう。

その他、顕微鏡の使い方や写真の撮り方など、役に立つ内容が盛りだくさんです。病理診断にかかわる、研修医、一般臨床医、若手病理医の方にとってのわかりやすい入門書であるとともに、学生さんにとってもイメージをもって学ぶのに最適な一冊になっていると思います。

さあ、臨床病理ワールドへようこそ！

2017年4月

伊藤智雄